今年も強かった!圧倒的実力で見せつけた正式種目

学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588 東京都豊島区
目白1丁目5番1号
黎明会館316号室

発行人・編集人
小泉　美結

年間500円

BOOKS KINOKUNIYA
紀伊國屋書店
学習院大学
ブックセンター
西2号館 1階
営業時間 10-17時
☎03-5953-4420

四大戦とは

74回目となる四大学運動競技大会（通称：四大戦）が10月20日から22日にかけて開催された。

旧制高等学校の時代から特に関わりのある学習院・成蹊・成城・武蔵の4大学がスポーツを通し、互いの親睦を深めることを目的としたこの四大戦は、昭和25年から続く伝統的なスポーツ大会である。

開催校は当番制で、今大会は成蹊大学にて開催された。この3日間で全ての種目が行われるのではなく、当年1月から事前に競われる公認団体（正式部会）による「正式種目」と、本大会期間中に行われるサークルなどの団体による「一般種目」を合計した得点で争う。

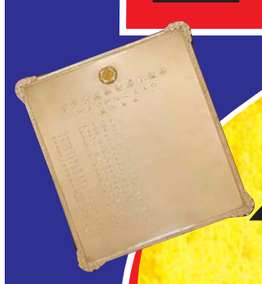
新型コロナウイルスの影響によって通常の開催ができない期間もあったが、2019年より中止となっていた一般種目が前大会から復活。今大会からは職員種目も再開されたことで、4年ぶりに制限なしの完全な形となる四大戦が実施された。

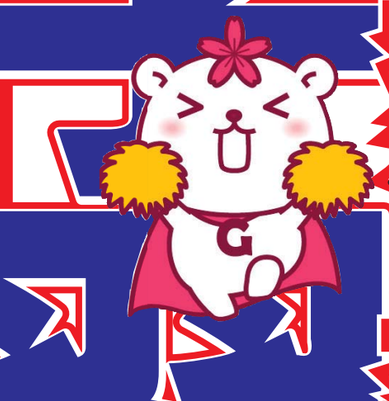
今大会のスローガンは『四重奏(カルテット)』。さまざまな楽器から1つの曲を奏であげるオーケストラのように、4大学のそれぞれの個性が重なることで新たなハーモニーを奏で、四大戦という1つの曲をより良いものにしたいという思いが込められている。

（小泉美結）

学習院大学 王者完全復活!! 本学の時代だ!!

2冠達成!! 総合優勝!!





駅伝

1位でゴールテープを切る柳選手

わずか1ポイント

雪辱の敗北から2年。前大会で成蹊大学から優勝を奪還した本学は、第70回大会ぶりの2年連続総合優勝を目指し、全選手が汗を流して戦った。

新型コロナウイルスによる大会運営の制限が今大会からなくなったことで、各大学から選手を応援しに来る学生の数は昨年と比べ増加。観客からの声援に応えるように各選手が実力を発揮し、大会全体が大いに盛り上がった。

1月から行われていた正式種目は、今大会期間中に開催された駅伝男子のワンツーフィニッシュなどの活躍もあり、他の3大学を圧倒。2位の成蹊大学とポイントの差をつけ、85・5点で堂々の優勝となった。一方、一般種目は各種目で4大学が接戦を繰り広げ、最後まで気の抜けない試合展開に。激闘の末、同じく2位の成蹊大学を制し、54点で優勝。しかし、その差は僅か1ポイント。試合結果から大会の白熱した様子を窺い知ることができるだろう。

正式種目と一般種目のダブル優勝から、本学の総合得点は139・5点。2年連続の総合優勝で「王者完全復活」を見せつける結果となった。

成城大学で開催予定である次大会も「王者」の名に相応しい圧倒的な強さで本学全体が盛り上がり、3年連続総合優勝となることを期待したい。

（小泉美結）

レース中盤で成蹊大学を追い抜いた男子Aチームが勢いそのまま、ゴールテープを切り、本学が1・2位を独占した。アンカーの柳翔太選手（国4）は「持ち味の攻めの走りで粘り、優勝に貢献できた」と振り返り、淺田友輝選手（数1）は「緊張したが楽しく走れた」と話す。女子も3・4位の大健闘。中根舞結選手（国1）は「応援のお陰で襷を繋げられた」と感謝を語る。

女子テニス

力強いサーブを打つ小野田選手

優勝した小野田采佳選手（心4）、竹田夏音選手（心4）は「ペアのおかげで前衛も絡みに行けた」、「チャンスボールを決めることができた」と振り返る。山田菜津子選手（政4）、佐藤圭衣選手（営4）は急遽ペアを組んだが、持ち前の技術で準優勝。本学が上位を独占した。

卓球

ポイントを決め気合いを入れる岩谷選手

初戦は大接戦の末、勝利。2回戦のストレート勝ちで更に勢いづくも、決勝で惜しくも敗戦。優勝は逃したものの、岩谷龍幸選手（営2）が「準優勝できたのは周りのお陰」とコメントするほど、選手を鼓舞する大声援と熱気で会場が包まれた。

遠藤選手（左）と柴田選手（右）

サークル団体「SPIRITS」は初戦の武蔵大学に快勝。決勝は途中で追いつく接戦となったが、27対30で成蹊大学に敗戦を喫し、準優勝となった。遠藤里保選手（営2）と柴田優羽選手（日1）は「より練習を重ね、来年は優勝を目指したい」と来年への意気込みを語る。

學習院櫻友會　入場無料

桜友会特別フォーラム

令和5年
11月28日(火)
午後6時～7時30分(開場午後5時)

会場：学習院創立百周年記念会館
主催：学習院同窓会 桜友会

お問合せ先　TEL：03-3988-3288 / Email：forum@gakushuin-ouyukai.jp

写真◎亀井重郎

女性活躍の先駆者は語る
映画字幕翻訳の楽しさと難しさ

学生の頃から目指した「好きな映画と英語の両方を生かせる仕事」、
それが字幕翻訳へ進むきっかけ。しかし、実際に字幕翻訳家として仕事が出来たのは20年後。
映画のように夢を叶え人生を楽しんできた生き方のお話を伺います。

講師　映画字幕翻訳者　戸田 奈津子 氏

昭和11年(1936年)生まれ　東京都出身、津田塾大学英文科卒
小学校の頃から母親と映画館に通い、多くの名作に出会う。大学在学中に字幕翻訳家を目指すことを決意。一時期、生命保険会社に勤務したこともあるが、その後はフリーとしてチャンスを待つ。米映画監督フランシス・フォード・コッポラ氏の推薦で映画「地獄の黙示録」(昭和54年)の翻訳を手がけたのを機に字幕翻訳者として本格的に活動。「E.T」「硫黄島からの手紙」「タイタニック」など1500本以上の翻訳を手がける。趣味は海外旅行。

事前のお申込みが必要です。ＱＲコードまたは以下ＵＲＬよりお申込みください。

お申込み先　https://www.gakushuin-ouyukai.jp/info/propose/forum/

合気道部

四方投げを決める主将の毛利さん

演武会

四大戦1日目となる20日、本館前では演武会が開催された。合気道、空手、少林寺拳法の3競技で日々の稽古の成果が披露された。

最初に演武を行ったのが合気道部。途中、強風に煽られる場面もあったが、成蹊・武蔵・成城・学習院の順で滞りなく技が披露された。合気道の中にもさまざまな流派があるそうで、本学と武蔵大学は同じ本部道場という流派、他2大学はそれぞれ別の流派に所属する。また演武の内容にも各大学、流派によって違いがあり、各大学の色が表れる。その違いを感じながら見ることができるのが、この四大戦演武会における最大の魅力だ。

大トリを飾った本学合気道部は、新入生・新入生（経験者）・2年生・幹部・主将の順に演武が行われ、新入生にとっては、今回が初めての演武会であった。

演武会と聞くと、重々しいイメージを持つ人も多いだろう。確かに、演武の間は、緊張した面持ちで技が決められていた。しかし、各演武が終わった後には主将ら上級生が演武を行った後輩を優しく迎え入れる姿が印象的で、本学合気道部のチームワークが発揮された。

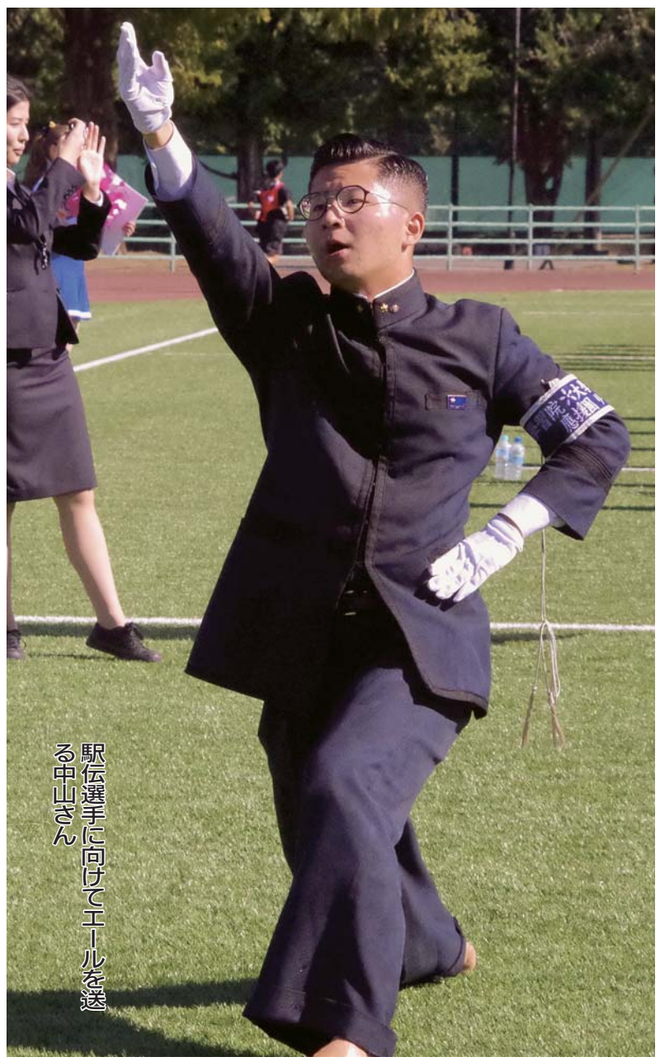
第63代目主将の毛利太郎さん（営3）は「初手の新入生は特に緊張していたが、大きな失敗や怪我も無く、総合的に見て良い演武を行うことができた」と全体を振り返った。同時に、自身の技について「去年に比べ、全体的に技の練度が上がった」と評価しつつ、腰が高くなってしまったことなど体力面での反省点を語る。

今後の予定として、12月に甲南大学にて学習院大学対甲南大学運動競技総合定期戦（通称：甲南戦）が行われるそうだ。「今後も部員一同稽古に励み高みを目指していきます」と今後の活動に向けての意気込みを語る毛利さん。

伸びしろで溢れる合気道部の活躍に今後も目が離せない。

（小泉美結）

応援団


駅伝選手に向けてエールを送る中山さん

駅伝選手を応援する吹奏楽部の部員たち

試合の戦況にかかわらず、多くの選手が應援團からのエールを力にし、闘志を燃やした。

本学應援團はリーダー部・チアリーダー部・吹奏楽部の3団体で形成され、運動部の応援を中心に活動を行う。今大会では開閉会式のみならず、さまざまな会場に出向き、応援で試合を盛り上げ、選手を支えた。リーダー部所属副團長兼リーダー長兼リーダー部長の中山蓮さん（政4）とチアリーダー部所属副團長の立原芽依さん（史4）は「勝利に貢献し、選手の力になりたいという強い思いを全員が持って臨むことができました」「他大学との交流は四大戦ならではの経験で、とても充実した3日間でした」と本大会を振り返る。

吹奏楽部所属副團長の大谷虎太朗さん（哲4）は印象的であった種目に男子バスケットボールを挙げ「普段の活動では応援する機会の少ない体育館競技は、距離の近さから選手との一体感を特に感じることができました。今後は体育館競技にも積極的に応援活動を行いたいです」と活動への意欲を見せた。

最後に、リーダー部所属團長廣瀬駿（生4）さんからコメントを頂いた。「来年度も本学が優勝できるよう他大学を圧倒する応援を届けます」。

本学應援團は応援依頼を募集している。気になる方は、各種SNSから詳細を確認してみて欲しい。

来年も應援團の本学を3連勝へと導く応援を期待する。

（小泉美結）

開会式の応援合戦にて、壇上でエールを送る廣瀬さん

應援團 Instagram
@GAKUSHUIN_OUENDAN

運動部常任委員会

本学の優勝が決まり、壇上で笑顔を見せる本学代表

本学が2年連続総合優勝を飾った第74回四大学運動競技大会。総合2連覇に向けて白熱した試合を見せてくれた選手たちの活躍はもちろんだが、大会運営で本大会を支えた運動部常任委員会（通称：運常）の尽力無くして本学の優勝はなかっただろう。

「昨年は開催校だから優勝できたと思われたくなかったため、総合優勝が決まったときは安心と嬉しさが込み上げてきました」と今大会を振り返った運動部常任委員会委員長の横山明紫さん（心4）。今年の1月から8ヶ月に渡る準備期間では、開催校で運営した経験を生かし、より良い運営となるよう支えたそうだ。四大戦推進局長として本大会運営の中心からまとめ上げた越智健生さん（国4）は「長期間に及ぶ準備で苦労はありましたが、出場選手の皆さんに楽しんで盛り上がってもらうことに加え、運営側も四大戦を楽しむことを心がけていました」と携わる全員が良い思い出となるよう心がけたと教えてくれた。また、準備期間を通し、各大学の四大戦推進局と仲を深めることができ、四大戦期間では各大学の勝利に対し、「おめでとう」とお互いを讃えあえる良い関係を築き合えるようにまでなったそうだ。

そんな横山さんと越智さんが共に本学総合優勝の勝因の1つとして挙げたのが前大会も出場した選手の経験とチームワークを活かし、見事なワンツーフィニッシュを決めた駅伝男子。今大会から新たな試みとして一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS：ユニバス）を通じて駅伝のインターネット配信を導入したことで、会場にいなくても駅伝を観戦することが可能となった。越智さんは「大学内外の方々に四大戦を知ってもらう良い機会となりました」と配信について語る。本学においては、一般種目出場選手がなかなか集まらず、運常員が直前までSNSなどでの宣伝や体育の授業へ訪問を行い、運常員が参加した種目もあったそうだ。このインターネット配信が四大戦の予選である学内大会、また四大戦の学内における認知度の向上に少しでも繋がることを2人は期待している。

駅伝以外にも多くの正式種目、一般種目で本年1月から本学選手たちが大健闘し、本学2連覇を支えた。最終的に、一般種目では6種目で1位、7競技で2位という大健闘。本学全体で今大会を盛り上げる結果となった。

選手と本紙読者に向けて、最後にコメントを頂いた。「今年度の優勝は我々運動部常任委員会や選手の力だけでなく、大学全体でご支援・ご協力していただいた結果だと思っております。ありがとうございました」「来年度も3連覇を目指し、選手に楽しんでもらえるよう、最大限のサポートをしていきます。ぜひ次大会も多くの方々に参加してもらえたら嬉しいです」

年々進化し続ける四大戦。次大会も出場する選手の活躍を期待すると共に、大会運営を支え、奮闘する運常員に総合3連覇を託したい。

（小泉美結）

教職員種目

教職員バレーボール

4年ぶりの復活となった教職員種目。学生たちの奮闘の裏で、教職員による熱戦が繰り広げられた。

22日に行われたバレーボール初戦。成城大学相手に追いつ追われつの大接戦の末、本学教職員チームは敗北を喫した。

その後行われた3位決定戦の相手は武蔵大学。第1セットを落とすも続く第2セットで猛攻を見せ、1セット奪取。しかし最終セットで敗れ、4位という結果に終わった。

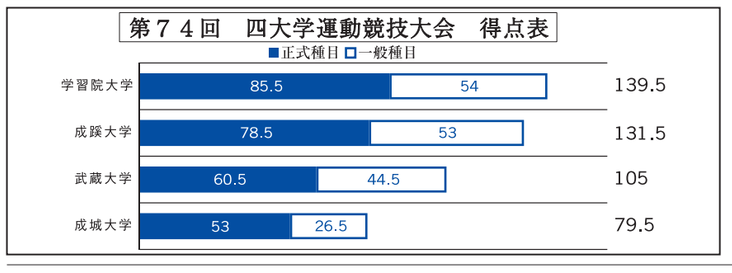
中心となってチームを盛り上げたのは石井さん（アドミッションセンター）と安藤さん（国際社会科学部事務室）。2人以外のメンバーには学生時代に別競技の経験はあるものの、バレーボールの経験はなかったそうだ。そんな中、「連続失点は仕方ない。いいプレーを褒めて楽しもう」とメンバーに伝え、士気を高めた石井さん。3回のみの事前練習で1セットとれたことに安堵する一方、「セッター経験者がいれば」と悔しさを滲ませた。安藤さんは4年ぶりに開催された教職員種目について、「職員同士で交流を深めるいい機会になった」と話す。

「次こそ勝ちます！また、来年共に戦う教職員のメンバーを大募集しています。経験の有無に関わらず、興味ある方は来年ぜひ、共に戦いましょう」と最後に次大会に向けて、意気込みを語る石井さん。

教職員たちも学生選手に負けず劣らず、熱い試合を見せていた。彼らの今後の活躍にも期待したい。

（黒川夏帆）

試合後笑顔を見せる本学教職員チーム



第42回経済学部同窓会総会開催

10月15日、第42回経済学部同窓会総会が開催された。今年は対面のみの開催となり、雨上がりの百周年記念会館には溢れるほど多くの参加者が集まった。

初めに、伊藤会長の挨拶と会計報告や予算案等の報告が行われた。

続いて、幼稚園から大学卒業までの18年間を学習院で過ごされた、株式会社松屋代表取締役社長の古屋毅彦氏による講演会が開催された。テーマは「百貨店とは何か」。松屋の歴史や小売業・百貨店業の変遷と課題、コロナ禍を経た現在のインバウンド需要の高まりなど、話題は多岐にわたった。時折ユーモアを交えつつ展開されるダイナミックな「現場」の話に多くの参加者が聞き入った。

その中でもとりわけ熱をもって語られたのは、松屋グループの将来に向けたありたい姿の実現についてである。「未来に希望の火を灯す、全てのステークホルダーが幸せになれる場を創造する」。松屋はこれを「MISSION」として位置づけ、顧客の期待を超えるエンターテイメント性を提供することを重視しているという。古屋氏は最後に主題であった百貨店とは何かについて「人々が豊かになるためのエネルギーを供給する仕事である」と語った。価値観が多様化する今、さまざまな需要に対応しつつ、未来につながる「幸せになれる場」を創り上げることへの強い気持ちが表れていた。

最後に内藤名誉院長の挨拶をもって、会は和やかに締めくくられた。（佐藤　歩）

from editor

弊紙スポーツ面に携わる部員にとって最大の見せ場は今回の四大戦号だ。編集責任者として取材が滞りなく進められるか、何より写真が撮れるか、引継ぎ時から不安であった。しかし始まってしまえば靴底を減らし多くの種目の会場を行き来し、メモを取り、選手の談話を取り、あれほど不安であった写真もこうして今、紙面に掲載できている▼とある選手のインタビューを進めていく内に、共通の友人がいることが判明し、その友人と中高の部活動のことを久方ぶりに思い出した。中高を同じ学び舎で過ごし、同じ運動系の部活動に所属し、同じ練習に打ち込んだ同輩でもあった彼女。私事もあり共に活動したのはたったの4年であったが、彼女を含め、同輩たちと活動した日々を今も鮮明に覚えている▼運動が特段好きというわけでもない私がスポーツから少し距離を置いた現部活動でも、この面の部長を担うことで、スポーツとの深い縁を感じる▼真摯に各種目に向き合う姿に畏敬の念を感じた私は、新聞という媒体を、努力を重ねた選手への賛辞として、叱咤激励として、気持ちを共感する場として、携わる人全員への感謝の気持ちを込めてこの紙面を通じ表現できるよう取り組んだ▼中高の友人と過ごした日々を回顧した事と同様に本学の学友と過ごした時間をいつか思い出す時が来るであろうからだ。

構成・レイアウト　小泉美結
取材　小泉美結　越野愛唯　菅原彩未　玉木三智　黒川夏帆　遠藤萌衣